

長編部門『見栄を張る』 藤村明世監督インタビュー

取材・文 = 水上賢治

ネガティブなことから目を逸らさない、 現実の本質を突いた作品を作っていきたい。

――国内映画祭で数々の入選を果たした『彼は月へ行った』とつなげてみてしまうのですが、今回の作品も人の死が中心にあって、残された側の人間が描かれています。ご自身の中にテーマとして“死”があるのでしょうか？

よく言われるんですけど、実はあまり意識はしていません。『彼は月へ行った』は、3日ぐらい前にメールのやりとりをした先輩が突然亡くなって、最終的にそのことが作品に色濃く反映されることになりました。今回に関しては、まずあったのは“お葬式”を題材にしたいという思いから。小さなころから、思っていたんです。“お葬式って不思議だな”と。中学のときに、祖父が亡くなったのですが、そのとき感じたのは、お葬式って死んだ人のためにすると思っていただけ、実は置いていかれた側の心の整理をするものではないかなということ。そこから興味を持って、お葬式のシーンが出てくる映画を率先してみたりしていました。どこかで1度、自分の映画の中で葬儀のシーンを撮りたい気持ちが以前からあって、今回は、それが叶ったというだけで。“死”をテーマに描き続けている意識はあまりないんです。

――作品は、かつて脚光を浴びながら、現在は伸び悩んでいる女優の絵梨子。どこか人生をあきらめかけていたとき、姉の訃報が入り、彼女は徐々に故郷に帰り、そこで姉が“泣き屋”をしていたことを知る。この“泣き屋”という題材も面白い着眼点だと思いました。

高校生のときに確かワイドショーで、こういう職業があると紹介されたのを見た覚えがあります。ただ、その紹介の仕方は、レンタル参列者のような扱いで。故人が多くの人に愛されているように見えるようにするといった説明が確かされていて、ひどくショックを受けました。“人は死んでしまったときでさえ、他人の目を気にして見栄を張らないといけないのか”と。今回、“葬式”が題材となったとき、この“泣き屋”のことも思い出して、形にしようと思いました。その中で、改めて“泣き屋”について調べてみたら、今はほぼ存在していない職業ですけど、そもそもワイドショーで紹介された“サクラ”的な存在ではなく、数十年ぐらい前までは僧侶のような存在で。お葬式で泣くことで、この世に残されたものとあの世へ旅立った人の橋渡しをするというか。死者の魂を送り、参列者を浄化する役割を担っていたと知り、これにもすごく興味がわいて、物語に反映させることにしました。

――お話しをお伺いしていると、なにか自分の知らない“未知”の世界にすごく興味を持たれている気がします。

確かに。そもそも主人公が田舎の故郷に帰るというのも憧れなんです。というのも、私は東京出身で世にいう田舎や故郷に帰る感覚ってまったくわからない。すごく体験したい気分がある。自分が体験したことのないことを映画を通して、疑似体験したい気持ちはすごくあるような気がします。

――では、極めて現実的なお話を描いていると思うんですけど、どこか藤村監督の中ではファンタジーやSFに臨んでいる感覚があるのでは？

それはあるかもしれません。知らない領域にアプローチしたいし、作品の中で自分がまずは自身の想像できないほど縁遠いところへ連れて行ってもらいたいと思っています。



――話を作品に戻しますと、夢に挫折しかけた絵梨子が、姉の死を通して自身を見つめなおして、次の一步を踏み出していく。その心情の変化がほんとうにきちんと段階を踏んで描かれていると思います。

まさにその心の移ろいをしっかりと丹念に描くことを最も大切にしました。主演をお願いした久保陽香さんもそこを1番気にされていて。納得するまで二人でとことん話し合っ、このシーンはいくらまで感情を出そうとか、ほんとうに細かすぎるぐらい演技の足し算および引き算をしてもらいました。信頼してついてきてくれた久保さんにはますます感謝しています。

—そのこだわりのたまものだと思いますが、とても心情の伝わるものになっていると思います。

そう受け止めていただけるとうれしい。絵梨子はどこか私自身も反映されています。大学を卒業して、好きな映画の仕事に就いたのだけれど、肝心の自分の作品を作ることが全然できなくて。そうこうしているうちに、知り合いが自主で撮った作品が賞を受賞したりし、映画の仕事についたのに、自分の夢からは遠ざかる一方。そんな道に迷っていた時期が自分にもありました。なので、あまり特定はしたくないんですけど、あえて言わせていただくと、いま夢がないとか、逆に夢を追っているとか、そういう20代の若い世代に観ていただけたらすごくうれしいです。

—ただ、ひとつ言わせてもらえると、もっとこの主人公の腹の底というかダークな本音を描いてもよかったかなと思います。これだけ彼女の表向きのメンタリティーが描けるのであれば、その裏側も描けると思います。

そこは私としても今後の課題だと思っています。自分の中でもっと彼女の汚い部分を描けたのではという思いがあります。そういった人間のドロドロしたところをもっと追求したい気持ちもありますし、今後クリアしていきたいですね。

—プロフィール的なところもお伺いしたいのですが、監督を目指すきっかけとなったことは？

父親が映画が好きで家にいっぱいビデオカセットがあって、それを幼稚園ぐらいのときから見ていました。たとえば『ホーム・アローン』とか大好きでした。ただ、そのときは、監督なんて当然意識していませんでした。興味があったのは俳優の方で、“テレビの中の人になりたい”と思っていました。それで小学生のとき、家の近くに劇団が出来たので、試しにいつか行ってみようかなと思っていました。そこには女性の演出家さんがいて、その方がものすごく格好良かった。それから作り手の方に憧れるようになって。中学に入って岩井俊二監督や中島哲也監督の作品を観たとき、漠然とですけど、心が決まりましたね。“映画を作りたい”と。

—その影響を受けた作品は？

一番は、岩井監督の『リリィ・シュシュのすべて』ですね。それまでハリウッドの映画ばかり観ていたんですけど、『リリィ・シュシュのすべて』の方が自分にとって圧倒的に近く感じる。その思春期にいる少年少女の感情がひしひしと伝わってくる。こんなに自分がシンパシーを感じるような映画があることに衝撃を受けました。映画ってこんな力があるんだということにも気づかせてくれた気がします。

—そういった映画を自分も作っていききたい気持ちがあると？

そうですね。娯楽に徹した明快な映画も嫌いじゃないですけど、自分としてはネガティブで暗いことから目を逸らさない現実の本質を突いた作品を作っていききたい。自身もいろいろな壁や困難にぶつかって絶望して、そこから“なんのこれしき”と立ち上がっていくタイプの性格ですから、否応なくそういう部分は作品に反映されるかなと思ってます。自分の中から生まれたオリジナルで人の感情をきちんと描いた映画を作っていききたいです。

—一次回の構想とかはすでにありますか？

いっぱいあります。ダークな題材になってしまうんですけど、夜逃げとか1回、描いてみたい。小学校のとき、隣の家の人が夜逃げして一瞬にしていなくなったことがあって。なんか不思議だなあと。映画に出来ないかなと思っています。

—今年の大阪アジア映画祭でのワールド・プレミアを経て、今回の上映となります。いま、どんな気持ちでしょうか？

まず、この国際コンペティションの場に立てたことが光栄で感謝しています。関西では2回上映されたのですが、関東では初上映ということで、私自身は東京出身ですから友人らにも観てもらえるかなと思っています。それから、海外からのゲストも数多くいらっしゃるタイミングなので、機会があったら感想をききたい。中でも日本のお葬式は海外の方の目にはどう映るのか興味があります。あと、この作品は和歌山で撮影したのですが、ほんとうに地元の方にいろいろとご協力いただきました。その協力いただいた方々、スタッフおよびキャストにいい報告ができてほんとうによかったです。



<上映スケジュール>

7月19日(火) 14:00～ SKIPシティ映像ホール
7月23日(土) 17:30～ SKIPシティ多目的ホール

『見栄を張る』

人間誰しも、どこかで見栄を張って生きている。
それは、死ぬときも。

絵梨子は疎遠だった姉の訃報を聞き、地元へ戻って来る。葬儀の後、絵梨子は姉が女手一つで育てていた息子・和馬を引き取る決意をする。そして姉の仕事は、葬儀で涙を誘う“泣き屋”だったことを知る。

監督：藤村明世
出演：久保陽香、岡田篤哉、似鳥美貴、辰寿広美、真弓、倉沢涼央(旧：齋藤雅弘)、時光陸
<2016年/日本/93分> ©Akiyo Fujimura



監督：藤村明世

1990年東京都生まれ。明治学院大学文学部芸術学科にて映画学を専攻。大学時代に通っていた、映画学校ニューシネマワークショップで撮った『彼は月へ行った』(14)が、第36回びわこ映画フェスティバルや仙台短篇映画祭2014、第6回下北沢映画祭などで入選し、評価される。大学卒業後、東宝系の商業映画の制作部や助監督を経て、再び映画監督の道を志す。本作『見栄を張る』は4本目の監督作品であり、初の長編映画となる。